

春季研究協議会発表

教職員の主体性が創る学校づくりを目指して

～沖縄県農業教育研究会等の取り組みを通した、教員の資質向上と教育実践～

沖縄県立中部農林高等学校 校長 新垣 博之

I はじめに

1 本主題について

学校では、教職員の主体的な教育活動（業務）が、活気ある学校をつくり、学校の特色（魅力）を創りだしており、各学校においても、校長として、生徒同様に教職員の「主体性を高める」を重点策の一つとしてしているところではないでしょうか。

そこで本県における教職員（農業教育）の主体性を高める資質向上の主な取り組みと、その主体性が創った本校での教育実践の事例を紹介し、今後、農業系高校の校長として、教職員の主体性を引き出し、特色ある学校づくりを目指すことを目的として本主題といたしました。

2 本県農業教育について

本県農業教育は、戦後、各地区の農学校等の系譜を受け、6校が創設されている（八重山農林は戦前より）。近年の高等学校編成整備等により、平成2年に久米島高校（園芸科改編）、平成20年に宮古総合実業高校（宮古農林高校と樟南高校（水産・商業）の統合）、平成12年に中部農林高校（福祉科設置）



農業系高校の地区別設置状況

されて以来、過去10年間で学校数の変化は無い。しかし時代の変遷により各校で学科改編が行われ、現在に至っている。現時点で農業系高校における統廃合の計画の予定はない。

現在、本県6農業系高校のうち、農業単独校は北部農林高校、南部農林高校、八重山農林高校の3校、中部農林高校は福祉科・高等支援学校（総合実務科）の併設、宮古総合実業高校は農業・商業・水産の併設、久米島高校は普通科と園芸科の併設となっている。

II 沖縄県農業教育研究会等の取り組みを通して（本県農業教育の取り組み）

1 沖縄県高等学校長協会農業部会

本農業部会では、「科学技術の進展、社会の変化及び多様な生徒の実態に対応する農業教育の在り方について調査・研究を行い、農業教育の創造とその発展に努める」を基本方針に掲げ、努力目標の実現に向け取り組んでいる。

県高等学校農業教育研究会・農場協会、県農ク連盟、農水行政等の連携など、農業教育の推進に取り組んでいる。

2 沖縄県校長会農業部会の活動の努力点（令和5年度）

（1）社会の変化や科学技術の進展に対応した農業教育の推進（2）進路指導の充実（3）教職員の資質向上と指導力の向上（4）農業系教員の確保のため教職課程設置大学との連携（5）学習指導要領に基づく長期的な視点による農業教育改革（6）全国高等学校農場協会九州支部大会（沖縄大会）の準備（7）県産業教育フェア農業部門の充実（8）沖縄県高等学校文化連盟との連携

（1）定時制農業科に係る調査研究

① 目的

全国的に定時制課程（夜間・昼間）農業科の設置は少なく九州では沖縄県の2校のみである。定時制課程をおく学校の問題点の一つとして、職員の全定交流（校内人事）の問題がある。希望者があるときは、スムーズであるが、それがない場合には、時に大きな問題となり、学校全体の問題になったこともある。

その様なことを含め、本調査研究では、教科「農業」教職員の定時制勤務に関する実態調査と生徒の定時制での学校生活に関する調査を通して、定時制農業科の現状と課題について把握し、本県農業教育の課題解決及び改善に役立てることを目的として実施

調査方法（Forms によるアンケート調査）

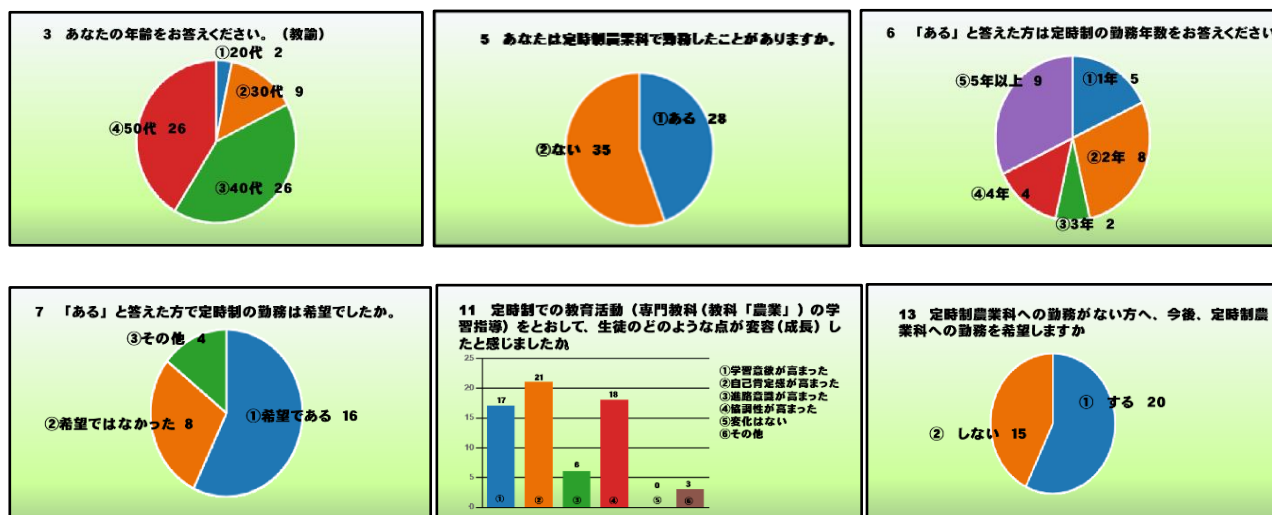
◆対象校 県立北部農林高等学校定時制農業科 3年制単位高校 在籍 48名

県立中部農林高等学校定時制農業科 4年制単位高校 在籍 116名

◆対象 農業教職員：149名 回答数：89名 回答率：59%

定時制生徒：162名（北農29 中農76） 回答数：105名 回答率：64%

② 教職員（教諭）アンケート結果（抜粋）（調査結果は人数、実数で表示）



ア) アンケート結果の分析

1) 職員の意識は前向きである（意欲的）

定時制希望に、前向きな回答（新しいことにチャレンジしたい、やってみいたい等）が多い。家庭環境の問題等で不登校等となり、全日制での学習が叶わなかった生徒に対し、意欲的に勤務したいと考える農業職員が存在することは心強い。



写真 教室での授業の様子

近年では県連農ク大会での入賞や琉球大学農学部への推薦入試合格など、生徒の学習意欲を高める教職員の努力を抜きには語れない。（定時制の実績は、全国的に見ても珍しいのでは）近年の活躍で定時制勤務への理解（意欲）が深まったと考える。

2) 職員の家庭等の事情に影響されている（相談等丁寧な対応が必要）

平日の午前中に時間が取れるとのことで定時制勤務を希望する回答と、逆に家庭的な理由で定時制勤務が出来ないという回答があり、定時制勤務は、特殊な職場環境にあり、自由記述の中には不本意な勤務実態（配置）を吐露するもの少なくなかった。

職員の定時制配置の際には、丁寧な説明や、納得させた上での配置が必要である。定時制勤務のイメージを悪くする要因になるのではないかと考える。

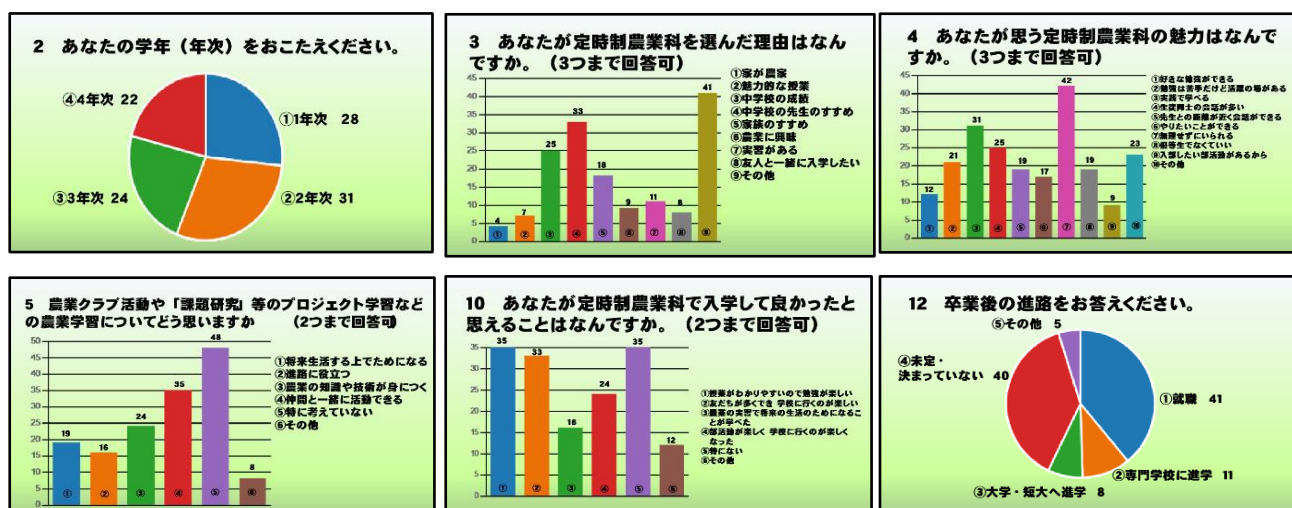
3) 農業実習に関する技術力の必要性を感じている

夜間授業であるため、生徒による昼間の農場管理は無い。農場管理や教材準備は、ほとんど担当者により行われることや、多様な生徒（特支教育等）への実習指導などから、農業実習の指導力の必要性を挙げている意見も多く見られた。

4) 多様な生徒へのサポートが必要

様々な特性を持つ生徒が多く在籍し、学校での集団生活や学習活動など、様々な支援を要することから、支援員配置等のサポート体制の構築は必要であり、今後、より細かい調査と検証が必要だと考える。

③ 生徒へのアンケート結果（抜粋）（調査結果は人数、実数で表示）



ア) アンケート結果の分析

1) 学校が安心して過ごせる場所である（居場所）

生徒が感じる魅力で一番多い回答が「無理せずになれる」に定時制での安心感が伺えた。ゆとりの授業ペース、校則や登校も比較的緩やか（通級制度）であるため自分のペースで無理せずに高校生活が過ごせ、高校での学びに充実感を感じている。



写真 果樹ハウス（接木実習）

2) 農業学習を通じた学びに充実感がある

農ク活動や課題研究等への学習活動に関心を持つ生徒も多くいる。「実践で学べる」「農業は役に立つ」「仲間と一緒に活動ができる」等、農業学習に対する肯定的な意見が多く、特に対人関係に乏しい生徒達にとって、農業学習で人の繋がりを実感し、「学校へいくのが楽しい」など、自己肯定感を高める活動になっていると考える。



写真 課題研究の発表

3) 校則の見直しへの要望が多い

自由回答では、茶髪やピアス等の生徒指導に対する意見が目をつけた。賛否両論はあるが、大胆な見直しも必要かと思う。生徒の実態に応じた校則の見直しにより、学校に対する意識の好転も考えられる。県外の定通制高校では、校則なしを謳う学校もある。

4) 手厚い進路サポートで進路実現

進路未定の回答が多いものの、進路支援による、琉球大学農学部や県立農大、4年生大学、専門学校等への進学をする生徒も少なくなく、農業学習（農ク活動）や部活動などを通して、学習意欲を向上させ、進路実現を果たす生徒が多く見られる。

④ まとめ

ア) 定時制勤務について、職員の多くは、前向きに考えていることが伺えた

イ) 定時制配置については、職員の家庭状況等の相談など丁寧な対応が必要である

ウ) 生徒は農業学習を通して、人間関係を育み、社会生活への対応力を高めている。

エ) 農業学習で意欲を高め、大学、県立農大、専門学校等、進学に意欲を高めている

オ) 農業を通じた学びの場として、定時制農業科の存在価値を高める必要がある

2 沖縄県高等学校農業教育研究会（沖農教研）

沖縄県における農業教育の振興を図ることを目的に農業教育に関する調査研究、農業学習の指導力向上、関係団体との連携協力等に関する事業を実施している。その主な取り組みを紹介する。

（1）教職員の専門性の技能や指導力の向上に関する主な取り組み

① 専門部会の取り組み

ア) 「造園技能検定実技指導講習会」 (環境創造系部会)

- 1) 目的 教職員の転勤等による専門外配置や、専門性の技術力向上を目的として、造園技能検定を所管する沖縄県職業能力開発協会と連携し、造園技能の習得と指導力の向上に資する。
- 2) 場所 沖縄県立中部農林高校造園科 造園施工室
- 3) 講師 仲村弘喜 (日本造園組合連合県支部長 (有) ナカムラ造園土木代表)
- 4) 対象 造園、緑地系学科等職員
- 5) 内容 造園技能検定実技試験に関する技術講習



写真 造園技能検定の実技指導

イ) 「農業教員のスキルアップ研修会 (各校で共通実施)」 (学校経営部会)

- 1) 目的 本部会では、農業機械等の操作技術や安全指導、メンテナンス等の共通の目標を設定し、各学校で取り組みを通して、農業教職員の安全指導等の指導力の向上に資する。
- 2) 場所 各学校
- 3) 対象 各校農業教職員
- 4) 講師 各校の農業機械担当等
- 5) 内容 農場実習時のヒヤリハット事例の紹介 農業機械関連の事故事例の紹介
故防止対策 農業機械等の操作、メンテナンス 等



写真 農業機械安全指導講習

ウ) スマート農業に関する講演・技術講習会

- 1) 目的 沖縄県におけるスマート農業の実践状や実際の農業機械等の機器操作について理解を深める
- 2) 場所 南部農林高校
- 3) 対象 各校農業教職員、生徒
- 4) 講師 MHC トリプルウィン(株) 食・農事業部
(株) 南九州沖縄クボタスマート農業推進部
- 5) 内容 沖縄県内におけるスマート農業の実践例
圃場における技術講習会
 - ・自動運転 (アシスト機能付き) トラクタ ・農業用ドローン
 - ・ラジコン草刈り機 ・パワーアシストスーツ
 - ・K S A S (クボタスマートアグリシステム)



写真 圃場での農機操作実践

② 農場長研修会の開催

- ア) 目的 各校の農場長を対象として、教育庁関係課による農場運営等に関する説明や、喫緊の農場運営等に関する課題や運営の改善などを協議し、農場運営の充実に資する。

1) 教育庁教育支援課農場予算担当による行政説明（3年ごとに開催）

場 所 教育庁会議室 開催時期 8月上旬（夏季休業中）

参加者 農業担当指導主事 各農場長

内 容 農場予算の仕組み、予算計画・執行等

2) 先輩農業教職員による講話

農場長経験のある先輩教員を招聘し、講話やディスカッションを通して、農業教育の変遷や、農場運営について、理解を深め、自校の農場部運営に役立てる。

③ 推薦入試・教員免許取得等に関する琉球大学農学部への訪問

ア) 目的 琉球大学農学部を訪問し、農業系高校の学習活動（農ク、アグリマイスター等）の紹介、推薦入学選抜等の維持継続、農業教員免許取得の推進等に関する要請を行う

イ) 時期 9月上旬

ウ) 参加者 本島3農業系高校長 3名

エ) 内容 農業系高校学習活動の紹介、推薦入学選抜の維持継続、農高出身者の学業等情報交換、教科「農業」教職免許取得の要請 他



写真 琉大農学部長への要請

④ 生徒の進路支援に関する事業（農学部等学科関連上位学校等への意識啓発活動）

ア) 目的 農学部等の学科関連上位学校等志願するための学校生活の過ごし方など、農高出身卒業生を招聘し、進路実現に向けた意識啓発を行う。

イ) 方法 県農ク連リーダーの研修内容として実施

ウ) 講師 農業系高校出身の大学生等

演題「農業クラブ活動を通して学んだこと」

講師：琉球大学大学院 伊敷優希（南部農林高卒）

3 沖縄県学校農業クラブ連盟による独自の技術検定「食品分析技術検定」

食品系学科クラブ員の専門技術の向上を目的に、平成28年度より、沖縄県農研食品部会を中心に、県農ク連技術検定として企画し実施。本技術検定の実施により、食品分析関連の実験に関する意識（技能）が向上し、プロジェクト研究等の主体的な学習に繋がっている。合格者は、測量上級検定、畜産技能検定に続き、整理番号を割り振り登録している。

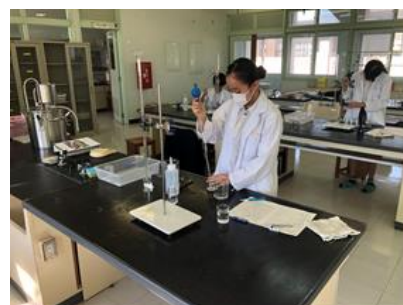


写真 検定の様子（中和滴定）

(1) 対象 食品系学科2年生 (2) 実施時期 1月中旬

(3) 場所 各学校 (4) 内容 「食酢中の酢酸の定量」

4 沖縄県立総合教育センター（産業技術教育センター）生徒実習・教職員研修

当センターは、平成 11 年に開設され、先端的で高度な情報機器、先端技術装置を完備して、産業教育に係る生徒実習、教職員研修を目的に運営。開設以来、多くの農業教諭（毎年 2 名）が 1 年長期研修を受講し、本県農業教員の指導力向上の原動力となっている。農業分野では、バイオ生産システム研究室と分析システム研究室を設置

農業担当 研究主事 2 名

（1）産業教育に係る生徒実習

主な実習内容 【バイオ生産システム研究室】

項 目	内 容
植物工場での野菜栽培	・植物工場での葉菜類、果菜類の栽培に関する技術習得 ・播種技術、成長解析、栽培環境、気象データの活用、果菜類の開花・着果技術等
バイオ技術講座	・植物バイオ及び食品微生物技術の基礎、培地の作成、組織培養の方法、茎頂の摘出等
顕微鏡及び各種測定機器の活用	・顕微鏡及び各種測定機器を活用した観察及び生育調査等

主な実習内容 【分析システム研究室】

項 目	内 容
土壌の成分分析	・原子吸光高度計を使った土壌のミネラル成分の分析。 ・CN コーダーを使った窒素含有率・炭素含有率の測定
食品の成分分析	・カロリー測定装置を活用した成分分析 ・アミノ酸、各種糖類、ミネラル、ビタミンの定量分析 ・クロマトグラフィ分析（HPLC、GCMS、イオンクロマト）
微生物に関する基礎実験	・生物顕微鏡や電子顕微鏡（SEM）を活用した微生物の観察、同定実験 ・食品の品質保持期限設定に関する実験
食品加工	・原料の一次加工（半分砕、混合微粉末化、加熱、搾汁） ・簡易レトルト加工 ・製品開発における試作品の製造

（2）教職員の専門技術の習得と資質向上を目指す研修

① 1 年長期研修（定員 2 名）

教科「農業」教職員（教諭）を対象に教科指導の課題解決を図る研修

② 短期研修

夏季休業等に農業技術の習得を目的とする研修

講座名	内 容
農業技術基礎講座	県立農業大学校等での講義や栽培圃場での実習を通し農業技術指導に必要な知識・技術の習得を目指す。
地域資源活用講座	学校または地域の農畜産物資源の活用に必要な知識と技術を習得し、6 次産業化に向けた商品開発への活用を目指す。
食の分析実験基礎講座	食の生産・製造にかかわる成分分析に必要な知識および技術の習得と授業への活用方法を学ぶ。
農業実習助手 スキルアップ講座	実習助手を対象とした農業の実験・実習の基本となる栽培技術、加工製造技術、試薬調製、実験の基本操作などスキルアップを図る。

6 教職員の主体性が創った本校での教育実践の事例（沖縄県立中部農林高等学校）

（1）学校の目指す方向性を示す取り組み

① 学校の存在意義・使命

ア) 豊かな人間性を育み、心身共に健全な社会人を育成する学校

イ) 地域の農業・福祉をはじめ、産業各分野の将来のスペシャリストに必要な資質・能力を育て、地域産業の人材育成をする学校

ウ) 学校の人材や施設等を活用し、地域農業の振興及び福祉の充実に貢献できる学校

② 学校運営のキャッチフレーズ（生徒には 学校生活のキャッチフレーズ）

「共に汗を流し 支え合い 協力し合う チーム中農」

目標に向かい 思いやりをもち 支え合って 協力していこう！

② スクールポリシー（育成したい資質・能力）の到達に向けた取り組み

令和3年度より、学校経営の目指す方向として、「中農の目指す生徒像」を掲げ、各教科・学科・各部において、内部評価として「努力点」「実践事項」「到達度」「その他の反省」「次学期への課題」「要望」の項目を設定し取り組んでいる（資料1）

ア) 目的

- 1) 学校として、教育活動（教科指導等）の方向性を示すこと
- 2) 生徒には、「目指す生徒像」に到達ができるよう促す
- 3) 教職員には、「目指す生徒像」の到達に向けて各教科等の指導に取り組む
- 4) 各教科等が取り組む指導方法について共有を図る

イ) 「目指す生徒像」の到達に向けた周知の方法

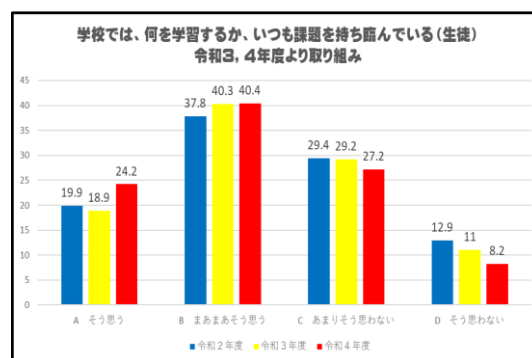
- 1) 全体集会等での校長講話
- 2) 学級担任や教科指導担当の指導
- 3) 教室や学科棟に掲示して周知

ウ) 取り組みの評価（学年度末実施 学校評価生徒アンケートより）

「中農の目指す生徒像」に到達に向けた取り組みの評価として、実施前（令和2年度）、実施後（令和3、4年度）の「生徒の学習に対する姿勢」の問いでみると、実施前より、「思う」と回答した割合が、年次的に増加し、「思わない」の回答が減少している。

特に令和4年度では「そう思わない」と回答した割合が8.2%で令和2年度より、4.7ポイント減少している。

しかし、全体的に約4割程度の生徒が学習に対する姿勢（意識）が弱い状況にあり、今後、取り組み工夫が必要である。学習指導要領改定の考え方として「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」が示されている。生徒は、



「学校での過ごし方（学び方）を理解する」、教職員は、「どのようなことを」「どのように教えるか」を実践する。その両輪をうまく統合させることが、生徒の学習活動（意欲）の向上に繋がることを、改めて認識を深めた。

（２）学科の学習指導体系づくり

①目的 学科の専門科目の学習内容が体系的な学習指導となるよう学科で検討し、学習指導体系表として作成し、学科運営計画にのせる。

②学習指導の体系表（資料２）

（３）校務分掌「生徒募集部」

生徒の定員確保を目的に生徒募集・入試業務に関する業務として設置

	総務・企画（１名 教諭） 広報（１名 教諭）
主な業務内容	中学校訪問による PR 活動、学校紹介資料作成（プレゼン、動画、パンフ等）、HP アップ、学校説明会の企画運営、体験入学（年３回）の企画運営、中学校開催の進路説明会への対応、学校見学の受入案内、学校新聞（中農だより）の作成・印刷・発送、高校入試業務企画運営、入試関係公募等の保管管理
	庶務（２名 実習助手）
	各業務内容の補佐、資料の印刷 中農だより発送作業

（４）中学１、２年生対象体験入学

①時期 １月下旬（高校入試に意識の高い時期）

②方法 体育館で各学科のブース設置し、参加者が自由に学科の紹介や体験ができる様にしている。スタンプラリーの形式等で必ず全学科を参観できるようにしている。



写真 体育館での実施の様子

（５）「１、２年生上級学校等志願者の集い」の開催

① 目的 大学や農大、公務員等、進学や難関就職先を目指す生徒等を対象に早期の進路意識を高める進路活動。またその集団が学級や学科で生徒同士の進路意識の啓発に繋げることもねらいとしている。

② 方法 ４月 名簿作成と活用(名簿の学科共有)

５月 基礎学力診断テスト分析説明 ６月 農高出身者職員講話 １０月 卒業生(大学生や農大生等)懇談会 １１月 ３年生模擬面接会への参加(見学)



写真 個々の基礎学力分析（ベネッセ）

③夏季講座の開催

対象	講座名	内 容	備 考
３年	国公立農学部小論文対策	農学部にて特化した小論文対策	期間：５日間
１、２年	農学部及び農大受験基礎・農業を学んでみよう基礎講座	食料生産、食品ロス、スマート農業、環境保全・創造等に関する講座	期間：３日間

(6) 沖縄県立中部農林高等支援学校総合実務科の併設

平成 22 年 4 月沖縄県立高等特別支援学校分教室として中農高に設置。平成 29 年 4 月より、県立中部農林高等支援学校総合実務科 現在創立 5 年目

① 学科 総合実務科（職業に関する学科）

② 生徒・職員 ア) 生徒数 1 学年 10 名 計 30 名

イ) 職員数 教頭 1 教諭 9（農業 2）養護 1 助手 1 事務 1
（中農高全定職員兼務発令）

③学校生活 制服、校則、学校行事、部活動など中農高と同じ

7 まとめ

教職員の主体性が創る学校づくりを目指すために、次に総括する。

(1) 学校の目指す方向性を明確に示すこと

① 学校のミッション（使命・存在意義）

② 目指す生徒像に向けた具体的な取り組み（育成したい資質・能力）

(2) 教職員のモチベーションを大事にする（職員のやる気を応援する）

① 農場等巡回職員とのコミュニケーション ②職員理解（家庭面、健康面）

③働き方改革（職場の雰囲気、適正な農場規模、業務改善）

キャッチフレーズ 「共に汗を流し 支え合い 協力し合う チーム中農」

(3) 教職員の資質向上（技術力・指導力）で教育活動への自信・誇りをもたす

①行政・地域との連携 ②農業教育研究会の充実（校内研修、専門部会等）

③カウンセリングマインドの姿勢 ※ 専門性の技能・指導力

(4) 農業の教育力に自信・誇りもたす

①農ク 3 大目標（科学性・社会性・指導性） ②多様な生徒への対応

道筋を立てる 人とのかかわり（コミュニケーション・協働） 生き物を育てる（慈しみ、責任） 収穫・製作の喜び 自己肯定感 進路意識の啓発

Ⅲ さいごに

今回、本発表にあたり、教職員の主体性の高まりは、学校の活性化を図り、とりわけ農業教育においては、農業学習の充実、農ク活動の活性化等により生徒の進路実現を果たす特色ある学校づくりの構築につながることを改めて考えるいい機会となった。今後も、生徒・職員の主体性を高める学校経営を目指していきたい。

沖縄県の農業教育は、FFJ 沖縄大会 (H26) の開催により、生徒・職員に自信と誇りをもたらし、現在でも継続される活動があるなど大きな影響を与えた。また当時の実施担当者が現在、各農業系高校で管理者として、意欲的に学校経営に取り組んでいる。

今後、本県農業教育の更なる充実に向け、教育行政をはじめ、関係機関と連携を深め、生徒の夢実現に向けた進路支援と、地域農業（産業）の振興に貢献していく所存である。

資料1 「目指す生徒像」に向けた評価表

令和4年度（3学期）努力目標及び学校内部評価（造園科）					
実践事項	努力点	自ら学び・考え、主体的に行動ができる生徒	思いやりを持ち、他者と協働ができる生徒	地域産業の発展に貢献できる生徒	その他
	①生活指導・教育相談体制の充実強化 ②身なり、挨拶等礼儀作法の定着指導 ③学科施設の整理整頓指導の徹底	①分かる授業、参加する授業の展開 ②検定・各種資格取得の取り組み強化 ③生徒募集活動の取り組み強化	①SDGsを意識した授業の展開 ②実験・実習の充実強化 ③各種行事への積極的参加	①進路指導体制の充実強化 ②地域社会と連携した教育活動の推進 ③資格取得時の各関係機関との連携強化	①農場予算の効率的運用 ②農場及び施設・設備の整備と活用
	(1)	①1日頃から記録学習を取り入れ、座学と実習の融合を図っている。 ②検定に向け、放課後・早期講座等を実施し生徒の意識高場に繋げた。 ③学科ポスターを作成し学科アピールを実施している。	①班編制で実習を行い、協力して実習に取り組む姿勢を育てた。 ②実習時に安全確認の徹底を実施。実習時の生徒体調管理に努めている。 ③F O大会各部門の選手強化に努め、測量競技大会開催に向け運動場を含めた校内環境整備に努めた。	①進路部・担任・保護者との連携し生徒個々に応じた進路選択に努めている。 ②課題研究で個人住宅庭園施工を行う。 ③普通教科の先生方の協力もあり、今年度も順調に資格取得活動が推進できている。	①毎週の学科会で予算執行状況を確認している。 ②農業と環境温室と園場を計画的に有効活用ができおり効果的な生徒実習が行われている。
	(2)	①今学期も各部署と連携し体制充実強化を図った。 ②マナトレ及び声かけを継続している。 ③掲示活動も含め、日頃より清掃を徹底している。	①農業祭等の学校行事を通して、個々の発表・活躍の場を設定した。 ②今年度実施予定の検定・資格試験を確実に実施。定時と連携しガス溶接講習も実施。 ③体験入学・中学校進路学習会で生徒募集活動を通して、生徒が中学生に指導	①担任・進路部と連携し着実に進路が決定した。毎週の学科会で確認している。 ・進路決定者31名 ②造園関連の技術講習会を計画している。 ③予定通り実施できている。	①学科全職員で連携・確認しており、順調に執行できている。 ②各施設、綿密な授業計画案を立て計画的な整備・活用につなげた。
到達度	(3)	①年間を通して各部署と連携体制の強化を図ることで、様々な事例に対応できた。 ②マナトレで学習に向かう姿勢を定着させた。 ③学科施設の整理整頓指導を徹底すること有効に施設活用ができた。	①専門科目で学習記録報告書を提出させ、確認・評価している。 ②年計通り資格取得活動を実施できた。 ③生徒募集活動を強化することで、募集定員を上回る受験生を獲得できた。	①担任・進路部・学科で連携しほとんどの生徒が進路が決定した。 ②造園技術講習会を実施した。 ③予定通り実施できた。	年間を通して①②を達成できた。
	1学期	目標到達度（4）	1学期	全体の3割以上できている	全体の3割以下である
	2学期	目標到達度（4）	2学期	1学期	1学期
	学期末	目標到達度（4）	学期末	2学期	2学期
その他の反省	・新学習指導要領に伴う、三観点評価に関する学科研修を行い一学期評価につなげた。(1学期) ・生徒の問題行動に対して管理者・生徒指導部と連携して早期対応ができた。(2学期) ・3学期重大な生徒指導案件があった。予防のための定期的な学科集会が必要であった。 ・今年度、本土名園見学研修(2年) 県内庭園見学研修(1・3年生)を3年ぶりに実施できた。(3学期)				
	・農業祭に向けた計画的な授業展開を行う。(1学期) ・3年生進路決定100%・全員3/1卒業に向けた取り組み体制の強化(2学期) ・過年度未習得科目修得に向けた取り組み強化(2学期) ・新2年生の3観点評価方法の検討(3学期)				
	・3年生進路決定100%・全員3/1卒業に向けた取り組み体制の強化(2学期) ・過年度未習得科目修得に向けた取り組み強化(2学期) ・新2年生の3観点評価方法の検討(3学期)				
	・3年生進路決定100%・全員3/1卒業に向けた取り組み体制の強化(2学期) ・過年度未習得科目修得に向けた取り組み強化(2学期) ・新2年生の3観点評価方法の検討(3学期)				
次回課題		要望 ・農場部全体での時間外実習評価方法の検討会実施(3学期)			

資料2 学習指導の体系表

学習指導体系表				
学科名: 食品科学科(食品加工コース)				
学科の教育目標	農畜産物の加工・貯蔵、品質管理及び調理や食品衛生に関する知識と技術を習得させ、食品製造業及び調理関係に従事できる能力と態度を育てる。			
コース指導目標	①指導目標 「食品製造」及び「微生物利用」や「食品化学」に関する基礎的な知識と技術を習得させ、食品製造関連の業務に従事できる技術者として必要な能力と態度を育てる。			
	②具体的目標 食品製造技術の習熟を通し、製品開発、貯蔵、品質管理に関する知識と技術を習得させる。また、「微生物利用」、「食品化学」の学習を通し、加工技術や原材料の成分分析、食品衛生に関する知識と技術を習得させる。			
科目の配置				
学年	科目名	単位数	具体的な到達目標(身につけさせる知識・技術)	到達度
1年	農業と環境	3	農業の役割について説明ができる。 エネルギー循環について説明ができる。 作物の栽培環境(土壌・気象・生物的要素)について説明ができる 学校農業クラブについて説明ができる。 プロジェクト学習について説明ができる。 畑の除草・耕うん・畝づくり・かん水ができる。 一般的な作物の播種・定植・収穫ができる。 農具の洗浄・整理整頓ができる。 作物の生育状況について観察・記録ができる。 資料のファイリングができる。	
	総合実習	2	「農環(草花・野菜)」「食品製造」の学習内容をもとに総合的に実践できる。 担当農場の整備(除草・整理整頓)ができる。	
	食品製造	3	衛生的な身なり・手洗いができる 味噌製造の一連の工程を通して麴の製造と説明ができる。 手ごねでバターロールと菓子パンを製造することができる。	
2年	総合実習	2	「食品製造」「食品調理」の学習内容をもとに総合的に実践できる。 生産物の加工、調理に関して組織的連携が取れる。 生産物の加工、調理の結果をもとに、具体的な考察ができる。	
	食品製造	3	食品製造における「5S」活動の実践ができる。 食品製造の意義、加工原理が説明できる。 加工品の製造に応じた器具の選定ができる。 実習における加工食品の製造工程が説明できる	
	製菓技術	2	加工原材料の加工適正が説明できる 菓子類の仕上げ(トッピング)の説明ができる 菓子類の包装(ラッピング)の説明ができる	
	微生物利用	2	微生物の種類や特徴・役割を理解する。 実験器具や薬品を安全に扱うことができる。 かびの分離と培養方法を学び、実践することができる。 顕微鏡の使い方を学び、微生物を観察・記録することができる。	
3年	課題研究	3	自ら課題を設定することができる。 課題解決の計画を立案することができる。 これまで学んだ知識技術を総合的に活用できる。 パワーポイントを利用して、プレゼン資料が作成できる。 研究成果を人前で発表することができる。 研究を通して自らの課題をみつけることができる	
	総合実習	2	「課題研究」「食品製造」「食品調理」「食品化学」「微生物利用」の学習内容をもとに実践ができる。 担当実習・実験室の活用・整理整頓・片付けができる。	
	食品製造	3	食品製造の衛生管理の意義が説明できる。 製品の製造過程の状態を説明できる 実習時間内での生産量の判断ができる。 生産管理、原価計算の説明ができる。	
	食品化学	2	食品化学の役割を説明できる。 薬品を安全に扱うことができる。 実験器具を安全に扱うことができる。 中和滴定、沈殿滴定の操作ができる。	